

Computer Report

Vol. 55 No. 6 6月号 (通巻 729号)

はじめの言葉

■政府の提案する安全政策で「自衛隊員のリスクが高まるかどうか」と迫る野党党首。これに対して「木を見て山を見ない論理だ」とやり返した政権党首。両者とも何か欠けている。そういう心象を国民に与える。政治的デキレースを与野党が阿吽の呼吸で演じているとすら思える。有り体に言えば、国会全体が、国民の安全を論ずる振りをしているかのようだ。政治は必要悪だという表現があるが、それを改めて思わせた。

■問われているのは国民のリスク回避であり安全確保である(はずだ)。有事を想定した安全対策とはそこが原点のはずだ。与野党ともどういう有事を想定しているのか、国民に説明する必要がある。戦闘地域に赴く任務を持っている自衛隊員のリスク云々ではない。戦闘地域に赴く自衛隊員にリスクが増えるかどうか他人に聞かなくてはならない野党も、戦闘になれば現地の当事者がリスクと向き合うとはっきり答えられない与党も普通でない。

■国家国民の安全政策の最終意思決定は国会において決断されるというが、こんなデキレースと野党の国会実態を見せつけられると不安は募る。これに脅威を感じる。こんな連中に身を委ねていることが今さらに恐怖である。国家間競争は虚々実々の駆け引きの応酬で展開されている。最近の習近平国家主席と日本の訪中団との間に友好ムードが、と報じられるその影で、したたかな中国による近辺海洋への積極進出が展開されている。

■国家間の友好ムードなどというものは、こんなものだろう。安全政策の国会論議も、こうしたしたたかさを認識した上で議論されることを望みたい。何でも口に出して言い訳めいた議論をすればいいというものではない。想定される脅威/リスクなどは、むしろ取るに足らないと考えるべきだ。真に脅威をもたらす敵は、常に想定外をついてくるはずだし、国会議員の想定範囲で全てが語れるはずもない。

■あけすけ過ぎる国防論議は外敵を利するだけだと考えるべきだろう。良い戦争も悪い戦争もないという表現がある。軍事的展開(状態)に正義はないとも言われる。そういうことにならないための備えをしておくことは、不幸なことだが、現実的世界情勢である。周辺国では、70年前の戦勝記念イベントが活発に行なわれ、核保有5ヶ国を中核にした国連が核拡散防止を訴えるという現実でもある。まさに最大の矛盾の中にある。

■しかも、戦後70年を言い、その過去の誤りを言いつつながら、この5ヶ国には今現在進行形で他国を占領支配している国も含まれている。非占領国にしてみれば、「依然、戦中状態にある」と言えるだろう。今こそ、矛盾だらけの戦勝5ヶ国ベースの国際スキームの見直しと同時に、国連スキームそのものを抜本的に見直す主張が出てきてもいい頃だろう。何せ、世界大戦終了後70年なのだから。

■グローバル化が言われ、あたかも世界規模での最適化が主張されたが、アラブの春/イスラム国の出現台頭など、世界の矛盾は吹き出してきている。実に今現在のグローバリゼーションは、決して最適状態になんかないという証明である。一地域/一地方すなわちリージョナル/ローカルな対応策ではどうにもならない次元での解決策が求められている。既存の国家論、既存の防衛論など吹き飛ばされそうな動きの気配を感じる。(藤見)